

# KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

「神の姿」：  
フィリピ書2:6-11 「キリスト賛歌」の理解について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 花咲, 一利 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	<a href="https://doi.org/10.18956/00006323">https://doi.org/10.18956/00006323</a>

## 「神の姿」

——フィリピ書 2 : 6 - 11 「キリスト賛歌」の理解について——

花 咲 一 利

### 序

新約聖書の中に散在している、いわゆる「キリスト賛歌」においては、さまざまなキリスト理解が述べられている。またこれらキリスト賛歌それ自体が、最も古い「信仰告白」の一つとなっている<sup>1)</sup>。そしてこれらは、初期キリスト論の形成において、重要な地位を占めることになるのである。キリスト賛歌は、新約聖書において、とりわけパウロ書簡において、これらを採用した著者によって一つの権威付けがなされている。キリスト賛歌を収録している書簡では、意図的にこう述べられている。

「詩編と賛歌 *ψμνος* と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。」(エフェ 5 : 19) や、「詩編と賛歌 *ψμνος* と霊的な歌により、感謝して心から神をほめたたえなさい。」(コロ 3 : 16b) の勧告の言葉にみられるように、賛歌 *ψμνος* は詩編と同列に置かれている。はたしてこれら諸賛歌すなわちキリスト賛歌などが、詩編と同等に教会で用いられていたかどうかは、検討の余地を残している。しかしながら、キリスト賛歌を採用した著者らは、既にこれらキリスト賛歌が特別な文書であるかのような扱いを、自らの著作において行なっていることは明白である。かくしてこれらキリスト賛歌は、旧約聖書の引用句と同様に、「聖なるテキストの威厳 *die Dignität eines heiligen Textes*」を持つことになる<sup>2)</sup>。そしてこの権威付けは、とりもなおさずキリスト賛歌の内容に対する権威付けともなっているのである。このことは、本論で取り扱うフィリピ書におけるキリスト賛歌において重要な意味を持っている。

さて、フィリピ書 2 章 6 - 11 節が、いわゆるキリスト賛歌となっていることはよく知られている<sup>3)</sup>。そしてこの賛歌におけるキリスト理解は、初期のキリスト論形成に独自のキリスト理解を提供しているのである。

特に、このフィリピ書 2 : 6 における

{	「神のかたち <i>μορφῆ θεοῦ</i> 」
{	「僕のかたち <i>μορφῆ δούλου</i> 」 <sup>8)</sup>

というキリスト理解は、その後の教会におけるキリスト論争の争点の一つとなる「ホモウシオス」論に影響を与え、さらに教会信条におけるキリスト論にも、強い影響を与えていると考える。すなわちニカイア信条 (325年)、ニカイア・コンスタンティノポリス信条 (381年) そしてカルケドン信条 (451年) がいずれも告白している、キリスト両性論、ホモウシオス理解などにも影響を与えていると考えられる。

特に今日に至るまで、キリスト教会の正統的な信仰告白となっているカルケドン信条におけるイエス理解には、このフィリピ書のキリスト賛歌における「神の姿」——「僕の姿」が影響を与えているのではないか。カルケドン信条はこう告白している。

「われわれの主イエス・キリストは、  
神性において父と同質 (ホモウシオス *ὁμοουσίον*) であるとともに、  
人間性において我々と同質 (ホモウシオス *ὁμοουσίον*) である。」<sup>4)</sup>

このカルケドン信条における同質 (ホモウシオス) 理解には、フィリピ書の賛歌のかたち *μορφῆ* 理解が、用いられているのではないかと考える。

以下において、フィリピ書の *μορφῆ* 理解について、またその影響についても検証していきたい。そしてフィリピ書のキリスト論の持つ意義と、またそこから今日の教会におけるキリスト論理解において指針となるものを導き出したいと考える。

## I フィリピ書 2 : 6 - 11 のキリスト賛歌について

このフィリピ書 2 : 6 - 11 が、キリスト賛歌であることはよく知られているが、その成立については、さまざまに議論されている。また賛歌の構造分析においても、同様にいくつかの説がとなえられている<sup>5)</sup>。ここでは、かつて E. Lohmeyer が試みた構造分析を用いることとする。それは 6 - 8 節、9 - 11 節の 2 部に分かれて、それぞれが三行からなる三つの節 (Strophe) によって構成され、整った詩型を成している<sup>6)</sup>。ここでは、賛歌全体の構成等を検討はしないが、*μορφῆ* について記される 6 - 7 節に関しては、以下のようになる。

- 6a キリストは神の身分 (姿) *μορφῆ θεοῦ* でありながら、
- b 固執しようとは思わず、
- c 神と等しい者であることに (ついて) *τὸ εἶναι ἴσα θεῷ*,
- 7a かえって自分を無にして、
- b 僕の身分 (姿) に *μορφῆν δούλου* なり
- c 人間と同じ者に *ἐν ὁμοιώματι* なられました。

このキリスト賛歌に用いられている *μορφή* という言葉は、本来ギリシア語の意味においては、人間の「姿、形、認識しうる外見」等を意味していた<sup>7)</sup>。*μορφή* の用例は新約聖書においてはマルコ16:12と、このフィリピ書2:6, 7の計3回のみである。しかしながら本来、ギリシア古典、あるいはヘレニズム期の著作等にはしばしば用いられており、また LXX (七十人訳聖書) においても「姿、像」などの訳語にも、この *μορφή* が採用されている<sup>8)</sup>。

ここではまず、この *μορφή* が何を意味しているのかを検討したい。またこの *μορφή* のフィリピ書における、日本語訳についても問題があるのではないかと考える。新共同訳では「神の身分」という訳を採用しているが、かつての口語訳では「神のかたち」、また青野太潮訳でも「神の形」という訳語を与えている。特に新共同訳に用いられた神の「身分」という語がこの *μορφή* に相応しい訳語であるのか、いささか疑問に思われる<sup>9)</sup>。この点について、山内 真は今日比較的多くの支持者を得ている説として *μορφή* の訳語として「かたち」を状態、身分、地位とする解釈があると述べて、ただしこの説の決定的弱点は、ギリシア語の「かたち」には、そのような意味が欠落しているところにあると述べている<sup>10)</sup>。本論では、*μορφή* に「姿」という訳語をあてることとする。この訳語も *μορφή* の意味を必ずしも的確に示すものではないが、より内容に近い言葉を探した結果であると理解いただきたい。

フィリピ書2:6には、まずキリストの先在が示されているが、イスラエルにおいては先在のメシアは、決して知られていなかったのである<sup>11)</sup>。またこのフィリピ書のキリスト賛歌は、イエスをメシアとして告白する賛歌とはなっていないのである。しかしながら、この賛歌の最後において「イエス・キリストは主 *κύριος* である」(2:11)と公に宣べていることは、本来イエスを救い主 *σωτήρ* などと告白しないキリスト賛歌においては、むしろイスラエルのといえるのではないか。またイエス・キリストは主という信仰告白の句は、新約聖書において他にはみられない表現である。しかしこの句は、パウロ的な告白であるとも考えられる。イエスと主 *κύριος* を結び付けて理解していたのは、パウロであったからである。「口でイエスは主 *κύριος* であると公に言い表わし」(ロマ10:9)、主の名を呼び求めることが救いと結びつくこと(同10:13)、また「イエスは主 *κύριος* である」(一コリ12:3)などの信仰告白の言葉、特にロマ書10:9の句は、フィリピ書の賛歌と関係していると考えられる。ただこのフィリピ書の賛歌における「イエス・キリストは主である」という告白は、パウロ的というよりも、むしろ旧約的理解によると思われる。詩編110:1LXX, イザ45:23LXX などにおける主(神)告白が直接、影響を与えていると考えられる<sup>12)</sup>。そしてこの主イエス・キリストが、今や全宇宙を父なる神と共に支配していることを述べて、フィリピ書の賛歌全体がイエス・キリストと父なる神との同一性を示す傾向にあるといえるであろう。

キリスト・イエス<sup>13)</sup>が、「神の姿 *μορφή θεού*」であることの意味についてはさまざまに論議されているが、内容から考えると6cの「神と等しくあること *τὸ εἶναι ἴσα θεῷ*」

と対になっていることから、まず存在論的に神と同等の者を、そしてその姿、形を示していると考えられる。イエスが神の姿であるのは、その存在やあり方と深くかかわっている。この6bでは(神の姿でありながら)そのことに固執しよう *ἀρπαγμός* とは思わず、と述べられる。この新約聖書でもこの箇所にもみ用いられている *ἀρπαγμός* (略奪、固執) をどう解釈するかによって意味が異なってくる。すなわち、略奪されるものとしてある状態(物) — *res rapienda* であるのか、すでに略奪されて(イエスによって)所有されている状態 *res rapta* であるのかである。やはりイエスの立場からすると、後者の状態 *res rapta* であると考えられる。それはイエス自身がすでに神の姿 *μορφή θεοῦ* であり、神と等しい存在であったにもかかわらず、あえて固執しなかったという、われわれの側からの信仰告白であるからに他ならない。そしてこう解釈することは、2:7b「僕の姿 *μορφή δούλου*」となったイエスについても、同様にわれわれの信仰告白として理解することになる。この僕の姿は、特に僕 *δούλος* 理解に集中している。古くからイザヤ書53章の僕との関係が指摘されてきたが<sup>14)</sup>、しかしこのイザヤ書における僕は、神の姿であったイエスとはやはり、かけ離れた存在であるといわざるを得ない。むしろマコ10:45の僕としての「人の子」に近いものである。このフィリ2:7bの僕の姿は、他の賛歌、例えばヨハネのロゴス賛歌のように、受肉したイエスを意味するものと考えられる。実際、キリスト賛歌においては、受肉に言及するものが少なくない<sup>15)</sup>。このフィリ2:7bの僕の姿 *μορφή δούλου* には、実体としてのイエスの姿が示されている。

2:7の *ὁμοίωμα* は、創世記1:26-27の「神の似姿 *Imago Dei*」理解を想起させると同時に、パウロが像、姿などを意味する言葉として、しばしば好んで用いた用語である<sup>16)</sup>。ロマ1:23「滅びることのない神の栄光を、似せた像 *ὁμοίωμα* と取り替えた」という言葉にはその「神の似姿」理解が連想されるが<sup>17)</sup>、パウロは慎重に述べていることに気付くのである。すなわち「(滅びることのない)神の栄光 *δόξα τοῦ θεοῦ*」が「似せた像に *ἐν ὁμοιώματι εἰκόνης*」に取り替えられたのは、神自身でも神の姿でもなく、神の属性の一つである「栄光 *δόξα*」に過ぎないということであり、決して神の本質とは関係ないのである<sup>18)</sup>。そしてこのフィリ2:7の *ὁμοίωμα* 理解に類似しているのは、ロマ8:3のイエス理解の方である。「御子を罪深い肉と同じ姿で *ἐν ὁμοιώματι σαρκός* この世に送り」における *ὁμοίωμα* は、このフィリピ書においてパウロがキリスト賛歌から得た御子イエス理解であると考えられる。すなわち、この世の肉の姿を意味する言葉が *ὁμοίωμα* であるということであり、キリスト賛歌はその意味で歌っているのである。

このフィリピ書のキリスト賛歌において示されている「同じ者 *ὁμοίωμα*」は、イエスが人間と同じ肉体をもった人を意味する言葉であり、姿 *μορφή* とは明らかに区別され、用いられたと考えられる。

2:8「十字架の死に(いたるまでも)」の句は、多くの研究者が指摘するとおり、パウロ

の編集句であるが、この十字架という言葉は、特にこのフィリピ書においてパウロの立場を示すものとなっている。彼は、「十字架に敵対して歩んでいる者」(同3:19)と、論敵を示すように、このフィリピ書では、十字架がパウロ側の用語となっているのである。ただ、「キリストの死」を「十字架の死」と表現するのは、新約聖書においてこの箇所のみである。純粋にパウロ的なイエス理解であるかどうかは、判断しがたい表現であるがいずれにせよ、本来このキリスト賛歌が告白したイエス理解ではないといえる。しかし死に言及している点で、僕としての姿 *μορφή* が実体をもつ存在であることが強調されていることは確かである。

ただこのキリスト賛歌における「先在のキリスト」理解は、他の同様の賛歌と共に、新たに齎らされたキリスト概念といえるであろう。しかしこの先在のキリスト理解のさきがけとなる理解を旧約聖書、旧約聖書統編の中に見いだすことができるのである。この問題については、以下のII 見えない「神の姿 *εἰκὼν τοῦ θεοῦ*」において、検討することとしたい。

## II 見えない「神の姿 *εἰκὼν τοῦ θεοῦ*」(コロ1:15)

フィリピ書2:6には、キリストの先在が示されているが、創造については特に言及していない。ところがフィリピ書以外のキリスト賛歌あるいはロゴス賛歌において、先在のキリストについて述べるものは、いずれも創造に関して述べているのである。フィリピ書のキリスト賛歌のみ、先在のキリストが唯一創造に関与しない点において特徴的なのである。

コロサイ書の賛歌では1:15で先在のキリスト、1:16ではキリストの創造における仲介が、そして1:17bではキリストによる創造の保持が述べられている。

またヘブライ書では1:3aで先在のキリストが、そして1:3bではキリストによる創造の保持が述べられている。

さらにロゴス賛歌(ヨハネ1:1-18)においても、1:1-2において先在のキリストが示され、1:3bではキリストの創造における仲介が述べられていた。

これらの賛歌に共通しているのは、先在のキリストは、神と共に創造に関与しているということである。特に神の姿を *εἰκὼν* について述べるコロサイ書のキリスト理解は、フィリピ書の神の姿 *μορφή* 問題を解く鍵となっていると考える。コロサイ書では、「御子は、見えない神の姿 *εἰκὼν* であり(1:15)、…万物は御子において造られた(1:17b)」と御子キリストによる創造を、キリスト賛歌のうちで唯一明確に述べている。

この御子キリストによる創造に、最も影響を与えたと考えられるのは、旧約統編の「知恵の書」における「知恵 *σοφία* による創造」理解である。この書の知恵 *σοφία* がこのコロサイ書のキリスト理解に用いられたことは、多くの研究者が指摘している<sup>10)</sup>。

御子キリストは「見えない神の姿 *εἰκὼν*<sup>20)</sup>」であり、すべてのものが造られる前に生まれ

た方(コロ1:15)」という創造論的キリスト理解における「姿 εἰκὼν」という属性には、知恵7:26の「知恵は神の善の姿 εἰκὼν<sup>21)</sup>」という知恵の属性が用いられたと考えられる<sup>22)</sup>。特に「御子キリストによる創造(コロ1:16)」というコロサイ書のキリスト賛歌独特のキリスト論には、「知恵の書」にのみ言及される「知恵 σοφίαによる創造」理解を用いていると考えられる<sup>23)</sup>。

「知恵の書」以前に著された旧約聖書、旧約統編の知恵文学などにおいても「先在の知恵」に関しては、しばしば言及されていた<sup>24)</sup>。

例えば、箴言8:22-23「主はその道の初めにわたし(知恵= σοφία)を造られた。いにしへの御業になお、先立って。永遠の昔、わたしは祝別されていた。太初、大地に先立って。」この箴言において、擬人化された知恵は、擬人化された救済者として述べられている<sup>25)</sup>。また創造以前に存在していたこと、すなわち先在の知恵として述べられている。この箴言において、知恵は人としてこの世に遣わされた救済者キリストを予見していると考えられるのである。

また旧約統編の知恵文学の一つである「シラ書」<sup>26)</sup>においても、「先在の知恵」は度々述べられる。

「すべての知恵 σοφία は、主から来る。主と共に永遠に存在する。(シラ1:1)」「知恵は、他のすべてのものに先立って προτέρα πάντων 造られた(同1:4)」、「この世が始まる前に πρὸ τοῦ αἰῶνος 33), ἀπ' ἀρχῆς, わたし(知恵)は造られた。わたしは永遠に存続する。(同24:9)」など、特にシラ書においては、知恵の先在性が強調されている<sup>27)</sup>。

これらの知恵文学ではいずれも「先在の知恵」が述べられるが、その知恵が創造に関与するという理解は見られない。なお、このシラ書の「先在の知恵」理解は、コロ1:17aの「御子は『すべてのものよりも先に πρὸ πάντων』いる」に用いられていると考えられる<sup>28)</sup>。なおパウロは、隠されていた知恵を「世界の始まる前から πρὸ τοῦ αἰῶνος」定めていた(一コリ2:7)と述べており、このシラ書における先在の知恵を、コリント教会の論敵に対して、神の知恵を述べる際に用いており、パウロがこの第一コリント書において、シラ書の先在の知恵理解を用いたと考えられる。特に G. Theißen は、一コリ2:6-16の中に、シラ書や知恵の書などのユダヤ的知恵の強い影響をみており<sup>29)</sup>、パウロの知恵理解はこれら知恵文学の影響下にあったと考えられる。

一方、旧約統編の「知恵の書」<sup>30)</sup>では、明確に神と共に創造に関与する「知恵」理解が述べられている点において、他の知恵文学とは異なっているのである。

「知恵は神の認識 ἐπιστήμης にあずかり、神の御業を見分けて行なう(知恵8:4)」、「万物の中で知恵にまさる造り手 τεχνῶντες<sup>31)</sup> がいるだろう。(同8:6)」、「知恵によって τῆ σοφία 人を形づくられました。(同9:2)」、「知恵はあなたと共にいて御業を知り、世界をお造りになったとき、そこにいました。(同9:9)」など。

## 「神の姿」

この「知恵の書」における「知恵による創造」理解がコロサイ書のキリスト賛歌に採用され、御子キリストによる創造というキリスト賛歌独自のキリスト理解を示すと共に、天使と御子キリストとの区別の際にも、効果的に用いられているのである。

しかしこのコロサイ書のキリスト賛歌の「神の姿 *εἰκὼν*」というキリスト理解は、神と（同質の）姿、かたちを意味するものではないと考える。それはこのキリスト賛歌における姿 *εἰκὼν* が、主に知恵の書における知恵 *σοφία* からの借用であることからいえるであろう。すなわち知恵の書において、知恵は「神の善の姿 *εἰκὼν*」というとき、その知恵 *σοφία* 自身は決して実体ウシアを伴うものでなく、それゆえに神の善 *εἰκὼν* も実体を持つものではない。それは箴言の擬人化された知恵においても、同様である。すなわち、この *εἰκὼν* は、決して実体を伴うキリストの姿を意味するものではないということである。このことは、後のいわゆるグノーシス文書において像、似姿を *εἰκὼν* と理解していることと無関係ではない。それゆえにキリスト論に関しては、実体を伴わない姿としての神の姿を意味する用語が *εἰκὼν* であると理解することができるであろう。これらのことからこのコロサイ書のキリスト賛歌における「神の姿 *εἰκὼν*」は、フィリピ書のキリスト賛歌における神の姿 *μορφή* とは、異なったキリスト理解を示していると結論づけることができるであろう。

### Ⅲ 「神の本質の完全な表れ」（ヘブ1：3）

また新約聖書において、イエスの姿をキリスト論的に表現する言葉として、やはりキリスト賛歌の一つであるヘブライ書1：3の中に「神の本質の完全な表れ」の一節がある。この「本質 *ὁμοστασεως* の完全な表れ（刻印） *χαρακτήρ*」はキリスト論において、独特の理解を示している。この句は、賛歌の第一連に対句となって置かれている<sup>32)</sup>。

1：3a ὃς ὢν ἀπαύρασμα τῆς δόξης  
καὶ χαρακτήρ τῆς ὁμοστασεως αὐτοῦ,

1：3a（御子イエスは）神の永遠の光輝（反映）であり、  
神の本質の刻印（現れ）である。

この *ἀπαύρασμα* 「反映」と *χαρακτήρ* 「現れ（刻印）」は、御子イエスについて対句となっているが、ここには知恵の書の「知恵 *σοφία*」の属性をみることができる。*ἀπαύρασμα*（知恵7：26）は、知恵の書において知恵の属性の一つであり、神の光の「反映」にすぎなかった<sup>33)</sup>。それは光である神の映しにすぎない知恵を示すものでもある。そして新約聖書においてはこの *ἀπαύρασμα* 「反映」が御子イエスに用いられているが、本来の意味である反映は、知恵には用いられても、御子イエスには相応しくないよう思われる。その反映と対になっているのが現れ *χαρακτήρ* であり、この言葉も *ἀπαύρασμα* 同様、新約聖書における用例は

ただこの箇所のみである。いずれも御子イエスを的確に表現する言葉とはならなかったが、ここではイエスを「神の本質 *ὕψστασις* の現れ」とイエスに関して、初めてその本質ヒュボスタシスについて言及されている点で、後のイエス理解を先取りしているといえるであろう。

#### Ⅳ 「神の姿」の教会信条における影響について

このフィリピ書 2 : 6 - 7 の *μορφῆ* 理解が、その後の教会におけるキリスト論争の争点の一つとなる「ホモウシオス」論に影響を与え、さらに教会信条におけるキリスト論に、強い影響を与えたことについて検討しておきたい。

特に、このフィリピ書 2 : 6 における

{	「神の姿 <i>μορφῆ θεοῦ</i> 」
	「僕の姿 <i>μορφῆ δούλου</i> 」

というキリスト理解は、本質 *οὐσία* において、神とイエス・キリストは同質 *ὁμοουσίον* であることを示すものである。このことをキリスト賛歌自身が強く意識していたかどうかは分からないが、イエスは受肉によって、つまりわれわれと同じ肉体を持ってこの世に来られたのであるから、その姿 *μορφῆ* は実体 *ὕψστασις* となったのである。すなわち、イエスの姿 *μορφῆ* は、僕の姿 *μορφῆ δούλου* であると同時に、神の姿 *μορφῆ θεοῦ* なのである。それは「神の像 *εἰκὼν τοῦ θεοῦ*」(コロ 1 : 15) のような外見をかたどっただけの似た姿ではなく、内実をとともなうものこそが、「神の姿 *μορφῆ θεοῦ*」なのである。このフィリピ書の神の姿 *μορφῆ θεοῦ* に至って初めて、それまでは実体を持つことのなかった神が実体 *ὕψστασις* を持つこととなったのである。

この実体 *ὕψστασις* となった神理解こそが、ニカイア信条 (325年)、ニカイア・コンスタンティノポリス信条 (381年) そしてカルケドン信条 (451年) に至るいずれの信条も告白している、ホモウシオス理解にも影響を与えたということである。

ニカイア信条は、「ホモウシオス (同質、同一実体の者)」を最初にその信条に採用したことで知られているが<sup>34)</sup>、御子イエス・キリストについてこう告白している。

「(神の子、イエス・キリストは)

父の本性 (本質 *οὐσία*) より神のひとり子として生れ、・・・

作られずして生れ、父と同一実体 (ホモウシオス *ὁμοουσίον*) である<sup>35)</sup>。」

父なる神と神の子イエス・キリストが、同一実体 (ホモウシオス) であるという表現はこの信条の成立においても論議され、問題とされていたが、御子イエス・キリストが、父なる神の本性 *οὐσία* の一部などではなく、また父なる神と不可分な存在であることを明確にするために採用されたと考えられる。また「造られずして生れ *γεννηθέντα οὐ ποιηθέντα*」の句は、このニカイア信条に先立って作成された、カイサレイアのエウセビオスの案ではただ

## 「神の姿」

「生れたるものを *γενενημένον* (信ず)」であった<sup>36)</sup>。しかしこの句も、父なる神は、御子イエスの元、初め (*ἀρχή*) であると主張していたアレイオス (アリウス) に対してイエスの先在性を強調するため、また御子イエスとその他の被造物との明確な分離を示すために付加されたものである。

このニカイア信条では、信条の後に続く異端排斥文で、はっきりと御子イエス・キリストについて「生まれる前にはなかった (存在しなかった)」、「存在しないものから、または他の本性=実体 *ὑποστάσις* または本質 *ουσία* から造られた」という者を、カトリック教会は排斥すると宣言している。このことは、アレイオス (アリウス) 派の「御子イエスは他の被造物とは別の完全なる被造物」といった教説を排斥するための目的で著わされた文であるが、父なる神の本性 *οὐσία* よりイエス・キリストは生れたことを強調することにもなっている。

このニカイア信条のキリスト論、父なる神と同一実体 (ホモウシオス) である御子イエス理解には、やはりフィリピ書の神の姿 *μορφή* であるキリスト理解が、用いられていることは確かである。

その後コンスタンティノポリス公会議 (381年) で宣言された、ニカイア・コンスタンティノポリス信条<sup>37)</sup>でもこう示される。

「(神の子である唯一の主イエス・キリストは)

造られずして生れ、父と一体 (ホモウシオス *ὁμοουσίον*) であり、すべてのものは彼によって造られた。<sup>38)</sup>」

この公会議においては、聖霊は被造物であると主張するマケドニウス派を排斥するために、聖霊についても「主であり生命の主である聖霊を、父から出て (父と子から出て)、父と子とともに礼拝され、尊ばれる。」と告白している点において重要である。

そしてカルケドン信条におけるイエス理解には、はっきりとフィリピ書のキリスト賛歌における「神の姿」——「僕の姿」が影響を与えていると考えられるのである。カルケドン信条の神とイエスに関する箇所は以下に示す。

「(われわれの主イエス・キリストは)、

神性において父と同質 (ホモウシオス *ὁμοουσίον*) であるとともに、

人間性において我々と同質 (ホモウシオス *ὁμοουσίον*) である<sup>39)</sup>。」

この同質 (ホモウシオス) 理解には、フィリピ書の神の姿 *μορφή* 理解が、用いられている。なぜなら、新約聖書の他の箇所においても、神の姿とイエスの姿が同じであることに言及する箇所はないからである。そしてカルケドン信条はこう告白している。

神性においてはこの世の前に父から生れ、人間性においては終わりの時代にわれわれのため、またわれわれの救いのために、神の母 *θεοτόκος* 処女マリアから生れた<sup>40)</sup>。

この告白は、直接的には異端として排斥されるネストリウスに対する反対の言葉でもあった。

彼は、イエスにおける神性と人性を分離して解釈したが、このことは厳しく教会から非難されていた。この点では、カルケドン信条に先立って20年も前に、アレクサンドリアのキュリロスによるネストリウス排斥文で問題にされている。キュリロスはこう宣言した。「父なる神のみことばが、肉体に実体 *ὑπόστασις* によって結ばれている、肉体を持ったキリストと同一であり、神であると同時に人であることを否定する者は排斥される。」<sup>41)</sup>

一方、カルケドン信条は、先の句に続いてこう告白している。

「同じ唯一のキリスト、主なるひとり子であり、二つの本性 *φύσεις* において、混合、変化、分割、分離せずに存在する。」<sup>42)</sup>

この告白においても、イエスの神性と人性を分離して理解しようとするネストリウスに対して慎重に宣言していることに気付くのであるが、この告白の中にも、フィリピ書2：6-7における神の姿と僕の姿とを見ることになるのである。換言すれば、フィリピ書におけるキリスト賛歌で歌われた「神の姿 *μορφῇ θεοῦ* — 僕の姿 *μορφῇ δούλου*」というキリスト理解は、後のイエス告白やキリスト論に重要な意味を持つ言葉となったといえるのではないか。

かくして、このカルケドン信条のイエス・キリスト告白は、その後1500年以上にわたり今日に至るまで、キリスト教会の正統的な信仰告白となったのである。

## 結論

以上、フィリピ書2：6-7のキリスト賛歌における「神の姿 *μορφῇ θεοῦ*」— 「僕の姿 *μορφῇ δούλου*」理解について、その意味とその後の教会における影響について検討してきた。

このフィリピ書2：6-7におけるキリスト告白、すなわち「イエス・キリストは『神の姿 *μορφῇ θεοῦ*』であり、『僕の姿 *μορφῇ δούλου*』である」というキリスト理解は、その後 *μορφῇ* という言葉で、教会にそのまま継承されていくことはなかった。しかしそれは、この *μορφῇ* が本来持っている意味が、必ずしもイエス・キリストを的確に表現していたとはいえなかったからである。むしろこのフィリピ書のキリスト賛歌におけるイエス・キリスト理解は、御子イエス・キリストを、その本質ウシアにおいて、神とは同質ホモウシオスであることを理解させるための、手掛りとなる理解を示していたのである。すなわちイエスは受肉によって、つまりわれわれと同じ肉体を持ってこの世に来られたのである。その姿 *μορφῇ* は、今や実体ヒュポスタシスとなったことを告白しているのが、他ならぬこのキリスト賛歌における神の姿と僕の姿であったといえるのではないか。イエスの姿 *μορφῇ* は、僕の姿 *μορφῇ δούλου* であると同時に、神の姿 *μορφῇ θεοῦ* なのである。

イエスによって、それまでは実体を持つことのなかった神が、この時初めて実体を持つこと

## 「神の姿」

となったことを、このフィリピ書のキリスト賛歌は告白しているのである。

このキリスト理解は、やがて父なる神と御子イエスとの関係を、教会が告白する際にとりわけ神と御子イエス・キリストは同質、同一実体（ホモウシオス）という信仰告白の最も重要な理解に用いられることになるのである。確かに、フィリピ書 2：6-7における

イエスの姿  $\mu\omicron\rho\phi\eta$  は、神の姿  $\mu\omicron\rho\phi\eta\ \theta\epsilon\omicron\upsilon$  であり

僕の姿  $\mu\omicron\rho\phi\eta\ \delta\omicron\upsilon\lambda\omicron\upsilon$  である。

という言葉が、そのまま信条の中に採用されたわけではないが、そのキリスト理解において、その後の教会信条に継承されることとなったと考えられる。特にカルケドン信条におけるキリスト論においてである。以下の告白がそのことを最もよく示している。

「(イエスは)、神性において父と同質（ホモウシオス）であるとともに、人間性において我々と同質（ホモウシオス）である。」

すなわちここに告白されたキリスト両性論（二性論）は前述した通り、今日に至るまで教会信条（信経、*credo*）の基本となっているのである。「父なる神と御子イエス・キリストは同質（同一実体）である」という使徒継承の信仰告白の中心となる理解は、フィリピ書のキリスト賛歌において最初に示されたキリスト理解、御子イエスは神の姿  $\mu\omicron\rho\phi\eta\ \theta\epsilon\omicron\upsilon$  であり、僕の姿  $\mu\omicron\rho\phi\eta\ \delta\omicron\upsilon\lambda\omicron\upsilon$  によっているということは、新約聖書の他の箇所には同様の理解がみられないことから、確かなことであろう。そしてこのキリスト論は、キリスト両性論と共に、三位一体論を形成する際にも、大切な新約聖書の証言の一つとなったと考えられる。<sup>43)</sup>

## 注

本論文は第43回関西新約聖書学会（2002年6月10日 於 神戸女学院大学）における研究発表に、加筆・修正を加えたものである。

（なお神学関連文献の略語は、基本的に Schwertner, S., *Theologische Realenzyklopädie, Abkürzungsverzeichnis*, Berlin·New York: Walter de Gruyter, 1976. に拠っている。）

- 1) Deichgräber, R., *Gottes hymnus und Christushymnus in der frühen Christenheit. Untersuchungen zu Form, Sprache und Stil der frühchristlichen Hymnen*, Studien zur Umwelt des Neuen Testaments (Abk. StUNT). 5, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1967, S. 60ff. Neufeld, V. H., *The Earliest Christian Confessions*, New Testament Tools and Studies (abbr. NTTS). V, Leiden: E. J. Brill, 1963, p. 7ff.

Deichgräber, R., *op. cit.*, S. 163 による「キリスト賛歌におけるキリストの属性に関する表」に、ヨハネのロゴス賛歌等を加筆修正したものを以下に示す。なお [ ] は本来の賛歌には含まれない。

キリストに関して	コロ1	ヘブ1	ヨハ1	フィリ2	一テモ3	一ペト2	一ペト3	エフェ1	エフェ1
先 在	1, 15	1, 3a	1, 1.2	2, 6a				1: 4	
創造における仲介	1, 16	[1, 2c]	1, 3						
創造の保持	1, 17b	1, 3b							
受 肉	1, 19		1, 10.14	2, 6b-7	3, 16 A $\alpha$				
受 難		1, 3c	1, 11	(2, 8)		2, 21f.	3, 18a	1: 7a	
十字架の死(死)	1, 20a			2, 8		2, 24a	3, 18b		
復 活	1, 18b				3, 16 A $\beta$		3, 21		1, 20a
高 擧		1, 3d		2, 9a					1, 20b
昇 天					3, 16 C $\beta$		3, 22a		
和解=救済	1, 20b					2, 24b	3: 21a	1: 10a	
すべての名にまさる名		[1, 4]	(1, 12)	2, 9b					1, 21
力による服従		[1, 6]		2, 10f.			3, 22b		1, 22a
主				2: 11					
宣教(教化)					3, 16 B $\beta$ Ca		3, 19		
教会(かしら)	1, 18a						1: 10b		1, 22b
教会(キリストの体)					(3, 16)				[1, 23a]
教会(満ちている場)					(Ca)				[1, 23b]

2) Deichgräber, R., *op. cit.*, S. 188f.

3) フォリビ書の研究者は、一部の編集句を除いて、概ねパウロ以前に遡ることのできるキリスト賛歌であると考えている。それら研究者のものを、以下ほぼ年代順に示す。

Lohmeyer, E., *Kyrios Jesus. Eine Untersuchung zu Phil 2, 5-11*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1927/28, 1961<sub>2</sub>(Neudr.), S. 4ff. ders., *Die Briefe an die Philipper, an die Kolosser und Philemon*, Kritisch-exegetischer Kommentar über das Neue Testament (Abk. KEK). IX, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1964<sub>13</sub>, S. 90ff. Deichgräber, R., *op. cit.*, S. 118. Gnllka, J., *Der Philipperbrief*, Herders theologischer Kommentar zum Neuen Testament (Abk. HThK). X/3, Freiburg et al.: Herder, 1968, S. 131f. Eckman, B., A Quantitative Material Analysis of the Philippians Hymn, *New Testament Studies* (abbr. NTS). 26, 1980, p.258. 永田竹司「初期キリスト論形成についての一考察 — ビリビ書二6-11文体構造を中心として—」『聖書学論集』17 1982年 81ページ Mengel, B., *Studien zum Philipperbrief*, Wissenschaftliche Untersuchungen zum Neuen Testament (Abk. WUNT). II/8, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1982, S. 246f. Schenk, W., *Die Philipperbriefe des Paulus. Kommentar*,

- Stuttgart et al.: W. Kohlhammer, 1984, S. 185ff. 山内真「ピリピ人への手紙」日本基督教団出版局 1987年 90ページ Binder, H., Erwägungen zu Phil 2 6-7b, *Zeitschrift für die neutestamentliche Wissenschaft* (Abk. ZNW). 78, 1987, S. 230. Müller, U. B., Der Christushymnus Phil 2 6-11, ZNW. 79, 1988, S. 18f. ders., *Der Brief des Paulus an die Philipper*, Theologischer Handkommentar zum Neuen Testament (Abk. ThHK). 11/1, Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 1993, S. 92f. Bergmeier, R., Weihnachten mit und ohne Glanz. Notizen zu Johannesprolog und Philipperhymnus, ZNW. 85, 1994, S. 59. Bockmuehl, "The Form of God" (Phil. 2: 6). Variations on a Theme of Jewish Mysticism. *Journal of Theological Studies* (abbr. JThS). 48, 1997, p. 2f. Vollenweider, S., Der 'Raub' der Gottgleichheit: Ein religionsgeschichtlicher Vorschlag zu Phil 2. 6(-11), NTS. 45, 1999, S. 413.
- 3) ここで  $\mu\omicron\rho\phi\eta\tau\omicron\upsilon\theta\theta\epsilon\iota\omicron\upsilon\theta$  のように  $\tau\omicron\upsilon\theta$  (単数属格の冠詞) を用いないのはギリシア詩文の特徴である。
- 4) Denzinger, H. und Schönmetzer, A., *Enchiridion Symbolorum. Definitonum et Declarationum*. Ed. XXXVI, Freiburg: Herder, 1976<sub>86</sub>, Denz. 301. カルケドン信条の日本語訳は、H. デンツォンガー編、A. シェーンメッツァー増補改訂、浜 寛五郎訳 「カトリック教会文書資料集」(改訂版) エンデルレ書店、1992年改訂4版、69ページによる。なお小高 毅編「原典 古代キリスト教思想史 2 ギリシア教父」教文館 2000年 412ページ以下の訳は次の通り。
- 「この同じ方(イエス)が神性において御父と同一本体の者(ホモウシオス)であり、かつまた人性において我々と同一本体の者(ホモウシオス)である。」(山村 敬訳)
- 5) その構成に関しては、Deichgräber, R., *op. cit.*, S. 122ff. 永田竹司 前掲書81ページ以下、等を参照のこと。
- 6) Lohmeyer, E., *idem*.
- 7) Behm, J.,  $\mu\omicron\rho\phi\eta, \kappa\tau\lambda$ . in *Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament* (Abk. ThWNT). IV, Stuttgart et al.: W. Kohlhammer, 1942, s.750f. Menge, H., *Langenscheidts Großwörterbuch Griechisch-Deutsch*, Berlin et al.: Langenscheidt, 1984<sub>25</sub>, S. 460. Bauer, W., Aland, K. u. Aland, B., *Wörterbuch zum Neuen Testament* (Abk. Bauer-Aland, Wb), Berlin: Walter de Gruyter, 1988<sub>8</sub>, Sp. 1069.
- 8) Behm, J., *idem*. Gnllka, J., *op. cit.*, S. 112.
- 9) この「神の身分」という訳語について、石川康輔は「六節の《神の身分》という語は『モルフェー』であるが、これはあるものの外形を意味するだけでなく、そのものの『ありかた』、『本性』をも指しており、七節の《僕の身分》に対応する。」と述べて、「身分」の解説をしている。(石川康輔「フィリピ書の信徒への手紙」『新約聖書注解Ⅱ』日本基督教団出版局 1991年 243ページ)
- 10) 山内 真 前掲書 96ページ。
- 11) Strack, H. L. und Billerbeck, P., *Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch*. III, München: C. H. Beck, 1994<sub>9</sub>, S. 620.
- 12) Gnllka, J., *op. cit.*, S.126f. Müller, U. B., *Der Christushymnus*, S. 38. ders. *Der Brief*. S. 107. ff.などは旧約の特にイザヤ書の影響をみている。

- 13) このキリスト賛歌が関係代名詞  $\delta\varsigma$  で受けているのは、前節の句キリスト・イエスであるため。
- 14) Jeremias, J., *Abba. Studien zur neutestamentlichen Theologie und Zeitgeschichte*, Göttingen: V & R, 1966, S. 209, 308ff. では特にこの関係を強いものと考えている。
- 15) 他にコロ 1 : 19, 一テモ 3 : 16 など。
- 16) パウロにおいて 5 回、それ以外では  $\delta\mu\lambda\omega\mu\alpha$  は黙 9 : 7、 $\delta\mu\lambda\omega\sigma\iota\varsigma$  の形でヤコ 3 : 9 に用いられている。
- 17) このロマ 1 : 23 の  $\delta\mu\lambda\omega\mu\alpha$  理解には、創世記の理解よりも、詩編 105 : 207 LXX、申 4 : 15 ff. の概念が用いられていると考えられる。apud Michel, O., *Der Brief an die Römer*, KEK. IV., Göttingen: V & R, 1978<sup>14</sup>, S. 103.
- 18) Jervell, J., *Imago Dei. Gen 1, 26f. im Spätjudentum, in der Gnosis und in den paulinischen Briefen*, Forschungen zur Religion und Literatur des Alten und Neuen Testament (Abk. FRLANT). 76, Göttingen: V & R, 1960, S. 97f.
- 19) 「知恵の書」の研究者では Georgi, D., *Weisheit Salomos*, JSHRs. III/4, Gütersloh: Gütersloher, 1980, S. 434. Schmitt, A., *Das Buch der Weisheit. Ein Kommentar*, Würzburg: Echter, 1986, S. 31. ders., *Weisheit. Die Neue Echter Bibel*, Würzburg: Echter, 1989, S. 15. など。  
一方、「コロサイ書」の研究者では、年代順に、Percy, E., *Die Probleme der Kolosser- und Epheserbriefe*, Skrifter Utgivna Av Kungl. Humanistiska Vetenskapssamfundet i Lund. XXXIX, Lund: C. W. K. Gleerup, 1946, S. 70. Glasson, T. F., Colossians I 18, 15 and Sirach XXIV, *Novum Testamentum* (Abk. NT). 11, 1969, p. 154ff. Lähnemann, J., *Der Kolosserbrief. Komposition, Situation und Argumentation*, Studien zum Neuen Testament (Abk. StNT). 3, Gütersloh: Gütersloher, 1971, S. 39. Lohse, E., *Der Briefe an die Kolosser und an Philemon*, KEK. IX/2, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1977<sup>15</sup>, S. 87. Gnllka, J., *Der Kolosserbrief*, HThK. X/1. Freiburg: Herder, 1980, S. 60. Pokorný, P., *Der Brief des Paulus an die Kolosser*, ThHK. X/1, Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, 1987, S. 56. Stettler, Chr., *Der Kolosserhymnus. Untersuchungen zu Form, traditions-geschichtlichem Hintergrund und Aussage von Kol 1, 15-20*, WUNT. II/131, Tübingen: M. Siebeck, 2000, S. 116. など。
- 20) 新約で  $\epsilon\acute{\iota}\kappa\acute{\omega}\nu$  の用例は 23 回であるが、コロサイ書では 2 回、キリスト賛歌ではこの箇所のみである。apud Kuhli, H.,  $\epsilon\acute{\iota}\kappa\acute{\omega}\nu$  in *Exegetisches Wörterbuch zum Neuen Testament* (Abk. EWNT). I, Stuttgart et al.: W. Kohlhammer, 1980, Sp. 947.
- 21) 知恵の書 7 : 26 での  $\epsilon\acute{\iota}\kappa\acute{\omega}\nu$  の意味は「神の写し」であって、神そのものではない。cf. Kuhli, H., *idem*.
- 22) Fichtner, J., *Weisheit Salomos*, Handbuch zum Alten Testament (Abk. HAT). II/6, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1938, S. 33.
- 23) この点に関しては、拙論「キリスト讃歌における天使概念」 『関西外国語大学 研究論集』 67号 1998年 292ページ参照。
- 24) von Rad, G., *Weisheit in Israel*, Neukirchen-Vluyn: Neukirchener, 1985, S. 189ff.

- 25) 「救済論的姿 soteriologische Gestalt」 apud Müller, H. -P., חִכְמָה in *Theologisches Wörterbuch zum Alten Testament* (Abk. ThWAT). II, Stuttgart et al.: W. Kohlhammer, 1977, Sp. 938.
- 26) 「シラ書」のギリシア語テキストは、Ziegler, J. (edidit), *Sapientia Iesu Filii Sirach*, Septuaginta. Vetus Testamentum Graecum. XII/2, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1965<sub>2</sub>. に拠っている。
- 27) その他「わたし (=知恵) はいと高き方 (=神) の口から出た」(シラ書24:3)の句では、神と知恵の「親密さ」が述べられている。なお、「親密さ Synusie」は、本来「知恵 σοφία」の属性であるが(Wilckens, U., σοφία in *ThWNT*. VII, S. 499ff.), 新約のキリスト賛歌においては、この理解がキリスト理解に用いられることになる。
- 28) Schnabel, E. J., *Law and Wisdom from Ben Sira to Paul*, WUNT. 2/16, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1985, p. 257.
- 29) Theißen, G., *Psychologische Aspekte paulinischer Theologie*, FRLANT. 131, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1983, S. 364ff. なお Conzelmann, H., *Der erste Brief an die Korinther*, KEK. V, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1981<sub>12</sub>, S. 79ff. では、むしろ知恵の書6-9章の知恵理解が、一コリ2:6-16に影響を与えたことが示されている。
- 一方、Lietzmann, H., *An die Korinther I. II*, Handbuch zum Neuen Testament (Abk. HAT). 9, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1934<sub>3</sub>, S. 13. Weiß, J., *Der erste Korintherbrief*, KEK. IX, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1910<sub>9</sub>/1977 (9 völlig neubearb. Aufl.1910), S. 54ff. では、フィロンやオリゲネスなどの影響は見るものの、シラ書などのユダヤ的な知恵理解の影響はあまり顧みられない。なお、Fascher, E., *Der erste Brief des Paulus an die Korinther*, ThHK. VII/1, Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, 1984<sub>3</sub>, S. 123f. ではグノーシスの背景のみを検討している。
- 30) この「知恵の書(原題はソロモンの知恵 Σοφία Σαλωμῶνος)」は、紀元前1世紀の中頃、エジプトのアレクサンドリアのユダヤ人ディアスポラで著されたヘレニズム期のユダヤ知恵文学の著作である。apud Heinisch, P., *Das Buch der Weisheit*. Exegetisches Handbuch zum Alten Testament (Abk. EHAT). 24, Münster: Aschendorff, 1912, S. XXI. Feldmann, F., *Das Buch der Weisheit*. Die Heilige Schrift des Alten Testament (Abk. HSAT). VI/4, Bonn: P. Hanstein, 1926, S. 11f. Fichtner, J., *op. cit.*, S. 8. Georgi, D., *op. cit.*, S. 395. なお「知恵の書」のテキストは、Ziegler, J. (edidit), *Sapientia Salomonis*, Septuaginta. Vetus Testamentum Graecum. XII/1, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1980<sub>3</sub>. に拠っている。
- 31) τεχνίτης「造り手」の、LXXでの用例はこのソロモンの知恵のみであるが、τεχνίτης(τεχνίτηςの男性形)はヘブ11:10に(神は都の)「設計者」とすると、神の属性として用いられている。apud Ziener, G., *Die theologische Begriffssprache im Buch der Weisheit*, Bonner biblische Beiträge (Abk. BBB). 11, Bonn: P. Hanstein, 1956, S. 126.
- 32) ヘブライ書の研究者の多くは知恵の書の「知恵 σοφία」概念の影響を指摘している。年代順に示すと、Windisch, H., *Der Hebräerbrief*, HNT. 14, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1933, S.11. Kuß, O., *Der Brief an die Hebräer*, Regensburger Neues Testament (Abk. RNT). 8/1, Regensburg: F. Pustet, 1966, S. 30f.

Spicq, C., *L'Épître aux Hébreux*, Sources Bibliques (abbr. SBI), Paris: J. Gabalda, 1977, p. 59. Zimmermann, H., *Das Bekenntnis der Hoffnung. Tradition u. Redaktion im Hebräerbrief*, Köln/Bonn: P. Hanstein, 1977, S. 59. Braun, H., *An die Hebräer*, HNT. 14, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1984, S. 24. Michel, O., *Der Brief an die Hebräer*, KEK. XIII, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1984<sub>14</sub>, S. 98. Hegermann, H., *Der Brief an die Hebräer*, ThHK. XVI, Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, 1988, S. 35. März, C.-P., *Hebräerbrief*, Die Neue Echter Bibel, Würzburg: Echter, 1989, S. 23f. Gräßer, E., *An die Hebräer*, Evangelisch-katholischer Kommentar zum Neuen Testament (Abk. EKK). XVII/1, Zürich/Neukirchen-Vluyn: Benziger/Neukirchener, 1990, S. 60. などである。なおヘブ 1 : 3 の内容については、拙論「ヘブル書 1 章 3 節『キリスト讃歌』と知恵概念について—『ソロモンの知恵』からの影響—」『基督教研究』 第52巻 1990年 89ページ以下参照。

- 33) この点に関しては、拙論前掲書93ページ以下参照。
- 34) カイサレリアのエウセビオス (263/65-339/40) によれば、この御子イエス・キリストを「ホモウシオス」と告白するに至ったのは、神学論争などによってではなく、ローマ皇帝 (コンスタンティヌス帝) の命によるものであるとされる。(エウセビオス「自分の教区にあてた書簡」による)
- 35) H. デンツィンガー編、A. シェーンメッツァー増補改訂、浜 寛五郎訳、前掲書27ページ。(Denz. 125. 旧64.)
- 36) Krebs, E., 「ニケア信教 Symbolum Nicaenum」『カトリック大辞典』Ⅲ 富山房 1952年 838ページ参照。
- 37) この信条 (カトリック用語では信経) は、「ニカイア信条」を引きのばしたもののように考えられ、17世紀末から「ニカイア・コンスタンティノポリス信条」と呼ばれているが、この呼称は正しくないとし、前掲書「カトリック教会文書資料集」(改訂版) では「コンスタンチノーブル信経」とのみ呼んでいる。(H. デンツィンガー編、A. シェーンメッツァー増補改訂、浜 寛五郎訳、前掲書37ページ)
- 38) H. デンツィンガー編、A. シェーンメッツァー増補改訂、浜 寛五郎訳、前掲書38ページ。(Denz. 150. 旧86.)
- 39) 同上69ページ。(Denz. 301. 旧148.) 以下カルケドン信条はこれに拠っている。
- 40) この告白の前には「罪を除いては、すべては私たちと同じである。」(ヘブ 4 : 15参照) の一文が置かれている。(H. デンツィンガー編、前掲書ではヘブ 3 : 15と誤記している。)
- 41) この排斥文は、十二箇条からなる異端宣言文となっており、430年11月初旬に作成され、同月30日にネストリウスに渡されたものである。同上60-61ページ。(Denz. 252-263. 旧113-124. 掲載したのは第二箇条で、Denz. 253. 旧114 である。なおギリシア語本文は、Sanctus Cyrillus Alexandrinus, *Epistulae* XVII, PG, LVII)
- 42) 同上69-70ページ。(Denz. 302.)
- 43) 特に最も古い信条とされる「古ローマ信条」において、既に三位一体論的告白がなされている点 (cf. Denz. 12) でも、このフィリビ書のキリスト理解は重要な意味を持つと考えられる。

(はなさき・かずとし 短期大学部助教授)